

(Q) 動物からみたら、学校は過酷ではないか。かわいそうだろう。飼うべきではない。

(A) こどもの教育のために学校で飼われている動物を学校飼育動物といいます。各地の動物病院(小動物開業)の獣医師が属する日本小動物獣医師会、日本学術会議での学校飼育動物の勉強会、また社)日本獣医師会の専門委員会など、この問題に真剣に取り組んでいる獣医師の見解は、「この問題にはいろいろ論議があることを承知しているが、学校の動物はこどもたちの育ちのために必要な動物である、という立場から論議を始め」としています。

子どもたちは私たちの未来であり、彼らが優しく育たなければ 私達は安心して老人になれません。それに、動物と子どものどっちが大事かといえば、人類としてこどもを「人」に育てる方がはるかに重要な命題でしょう。また「動物が可哀想」といったら、私たちは動物性たんぱく質もとることができないでしょう。

しかし、まだまだ動物の状況が悪く悲惨なことも事実で、これにより子どもへの逆効果が心配さ

れますので、これまでもずっと、学校を支援しようと全国で獣医師会が動いており、今も努力しています。

今まで何度も講演会を開き、長い間獣医師会が行政に働きかけてきた大阪府でも、最近県教育委員会から正式に獣医師会に相談があるなど、この考えはじょじょに広がっています。ぜひ、皆様も、学校から動物を取り去るのではなく、良い飼育を支援するようにお願いします。

しかし、命をになう子どもの主体性をくずさないような支援が必要です。たとえば夏休み、親やボランティアが子どもそっちのけで動物の世話をせず、当番の子どもの指揮のもとに「大人は手伝い」に止める注意が必要でしょう。